

莊村清志さん インタビュー

—— やまと芸術文化ホールへのご出演は2回目ですらっしゃいますね。

莊村) 錦織さんとは、彼がプロデュースする、色々なゲストを呼んで開催する演奏会で、何回も呼んでいただいています。そういった演奏会とは別に、二人の、このようなジョイントの演奏会も数多くやらせていただいています。

—— 錦織さんとは久しぶりの共演とお聞きしています。

莊村) そうなんです！こここのところ久しぶりです。間が空いてしまって、錦織さんに嫌われたのかと思ってしまいましたが、今回、この公演が実現して、まだ大丈夫だとほっとしています。(笑)

—— テノールとギターのコラボレーションは、やまと芸術文化ホールでも初めてですので大変楽しみです。

莊村) 普通、歌の伴奏はピアノですものね。伴奏する時は、自分も歌っているように心がけています。実際は伴奏部分を担当しているけれど、メロディーを心の中で歌います。そうすると、すごくしっくりくるし、歌い手の気持ちや動きにも敏感に察知して合わせていけるんです。ピアノのように音量が大きくないので、逆に歌い手のほうも、ギターの音を聞いてくれる部分もあります。すごくアンサンブルしやすいです。

—— 身体が楽器の歌い手と、音を作るギターという楽器だからこそ、相性のようなものがあるように思えますね。

莊村) そういう意味では、歌が一番、いわゆる「メロディーを歌わせる」と言った意味で、最高の楽器だと思います。ヴァイオリンなども弓で音を伸ばせる楽器だから、歌える楽器だと思います。ギターは、そういう意味では一つ一つの音が減衰してしまう中で進んでいくので、完全に歌っているかということ、そうではないのですが、減衰する中でいかに歌わせるかというのがギタリスト冥利というか、楽しみですね。減衰する音を使いながら、尚且つ歌っているかの如く弾くということが聴かせどころだと思います。

—— 歌も呼吸しながら、メロディーを奏でていくと思うので、タイミングが大事ですね。

莊村) そうですね。一緒に呼吸していく感じですね。ワンフレーズの中で、お互い途中で吸うことはなく、吐くか止めるかです。特に、気を使って歌を聴いているとフレーズの中で吸っていることはないですね。ワンフレーズが終わったタイミングで、一緒にスウーッと息を吸って、次に入るといふことですね。

—— 錦織さんだからこそその難しさや楽しみはありますか？

莊村) 錦織さんは、本当に、人間的にも清々しい人で、表裏もなく、こうしてほしい等、正直に言ってくれるので、お互いに「わかりました」って上手くいきます。難しさは全くないです。彼自身がとてもピュアな感じがします。歌一本にかけているんだというのは、毎回感じますね。前乗りや、一日開けての演奏会もコンディションを整えるために、ひたすら部屋に閉じこもっていて、そこらへんはすごいです。プロ意識が高いです。それもあって、美しい、透き通って朗々とした、声量もある、そういう声が保たれているんじゃないかと思うんです。一緒に演奏するたびに思うんですが、本当に素晴らしい声だなあと、毎回そう思います。仕事というより、彼の美しい歌声を楽しみながら伴奏しています。

—— チラシには3曲公開されていますが、どのような構成にしようと考えられているのでしょうか。

莊村) 前半にイタリア古典を持ってきて、僕のソロで古い曲を間に一曲演奏をしたり、後半でオペラアリアや、イタリアカンツォーネをと考えています。錦織さんのあの声量と美しい声に合うので、歌ってもらいたいというのもあり、「グラナダ」も演奏します。日本の歌も入れていきます。「花は咲く」は彼の希望で演奏します。この曲も、本当にいい曲ですよ。

—— コロナ禍を経て、今後の活動予定はいかがでしょうか。

莊村) 男性4名の「ギタリストたちの饗宴」を行っていました。その活動は、ソロあり、デュオあり、トリオあり、カルテットありの4通りで行っていたのですが、その公演がコロナで中止になりました。ホールは空いているので、そこを使わせてもらって、福田進一さんが提案した、デュオだけの設定にして同じメンバーでやらないか、ということになりました。4人のメンバーで6通りの組み合わせのデュオができるわけです。それをレコーディングしたんです。せっかくなので、「こういう企画はあまりないから、演奏会やろうよ」と提案しました。それで、すぐに各マネージャーさんにこういう企画でということ伝えて、今年も6月と来年年明けにも行うことになりました。今年度はそれがメインで活動しています。

—— 新しいことにも挑戦され、ギターの最前線を進んでいらっしゃると改めて感じました。

莊村) 若い頃よりも、そういった欲求は出てきています。別に、無理してやっているわけでもなくて、自然にいろいろなアイデアが出てくるんです。だから、だんだん音楽が好きになってきている気がしています。

—— 音楽に対する意識も変わってきているのでしょうか。

莊村) 若い頃は、ギターと格闘しているような感じで、一生懸命、頑張って戦うみたいな感じでした。50歳を過ぎてから、ギターが自分の最高の友だちになっていって、自分の気持ちをギターが表してくれるという風になりました。若い頃は、ただ一生懸命練習して、完璧にノーマスで弾いて、楽器と格闘していたのが、そうではなく、ギターを自分の味方にするようになっていきました。

—— 大和では、アムールホールで演奏活動をされていたとお聞きしました。

莊村) そうですね。ただ、会場が150席くらいで、3年前からはコロナの影響で全然演奏できていません。ホールのオーナーの奥様が、音楽がとても好きで、何回も呼んでいただいていた。響きもよく、ギターにはもってこいの会場なのですが、コロナでストップしています。

—— やまと芸術文化ホールでの今回の公演の演奏のポイントは何でしょう？

莊村) まずは、錦織さんの歌声に酔いしれていただきたいと思います。1000人のホールでも、隅々まで響き渡り、彼のすごいところは、フォルテになったときに音が割れないところです。いい質の声をそのまま保った大きな声なので、毎回驚きます。それが、彼が自分の体に気を付けてケアしている部分なのかと思います。
ギターソロは、アルハンブラが静かな曲で、歌の迫力のあるフォルテとは真逆の静かな、弱音の世界です。その歌とのコントラストで、楽しんでいただければと思います。

—— 最後に、ご来場の皆様へメッセージをお願いします。

莊村) 久しぶりで楽しみです。久しぶりだからこそ、ある程度の緊張感をお互いに保ちつつ演奏できるかなと思います。今回、本当に久しぶりで、二人で一つの素晴らしい音楽を奏でられると思います。その辺を聴いていただければ嬉しいです。